

メインシナリオ／グランド第5回
『あなたのための希望のうた 第5話』 個別リアクション

『止められない愚かさ』

ルスタンが水の魔術師殺人犯であるという証拠は見つけれなかった。
しかし、このまま静観していることもできず、あづまは深夜にアンセルを訪ねた。
彼はまだ起きていた。
話がある、と硬い声であづまが告げるとアンセルは彼女を中へ通した。
「こんな時間にごめんなさい。けれど、どうしてもお伝えしたいことがあります」
いつも人を包み込むような微笑みが印象的な彼女にしては珍しく、余裕のなさが窺える。
何かあったのか、とアンセルは気遣わし気に尋ねた。
あづまは少しためらった後に、ぼつぼつと話し出す。
「リルダさんが、自警団の存在に懸念を抱いているそうです。何か事を起こしたいなら、早めに決行したほうがいいでしょう」
「物騒な話だな。突然どうしたんだ、女将さんらしくもない」
はぐらかされる、とあづまは感じた。
しかし、証拠がそろわないまま話し続けたところで、アンセルはどこまであづまに応じてくれるだろうか。
「アンセルさん、今のマテオ・テーペで騎士団に次ぐ武力勢力を持っているのはあなたです。とても自然な形で、けれどタイミングよく……まるで筋書き通りのように保有しました。町の人のために働くあなたは、すぐに人々の心を掴みましたね。——仮に、騎士団を押し退けたとして、あなたの狙いは何ですか。……いえ、なぜ伯爵を狙っているのですか？」
直後、アンセルの空気が重く冷えた。
アンセルは薄く笑う。観念したような笑みだ。
「あなたがもっと鈍い人ならよかったのに。それで、その推測で私をどうするつもりで？」
「しよせんは推測ですからね……今、誰かに話したところで、悪く言われるのはあたしのほうでしょう。だから、あなたを助けましょう。その代わりに、伯爵を狙う理由を教えてくださいな」
「おかしな人だ。失敗したら、ただではすまないというのに。そんなことをして、あなたに何の得がある？」
あづまは、クスッと笑う。そんなこともわからないのか、と目が言っていた。
「女が命がけで男を助ける時なんて、その人に惹かれているからに決まっていますでしょう」
アンセルは驚きの後に気まずそうに目をそらし、
「今は独り身とはいえ、私は既婚者だが」
と、こぼした。
あづまはクスクスと笑い続けた。

あづまの推測通り、水の魔術師を殺害したのはルスタンだった。
アンセルの本名はキンバリー・アルビストンという。
かつての公国の男爵であった。
彼の娘は公王の側室となったが病にかかり、命を落とす。
彼がそれを知ったのは、娘が亡くなった後だった。
病に倒れたという知らせもなく、いきなり訃報が届いたのだ。
聞いた話では、娘は一切の治療をされず放っておかれていたという。
アンセルは公王を強く恨んだが、その後、大洪水により公王は死去。
生き残ったアンセルの憎しみは、事情を知っていたはずの伯爵に向いた。
娘が亡くなったのは、洪水が起こる三ヶ月前のことだった。

「訃報が届いて、公王に事情を聞きに行ったのでしょうか？」
「ああ。だが、公王は謝罪だけで、実際に何があったのかは話してくださらなかった……」
アンセルは顔を覆い、背を丸めた。
「今さら返らないとわかっているけど、止められないのだ。こんな愚か者でも、協力すると言うのか……？」
あづまは席を立つと、何も言わずにそっとその背を撫でた。

こちらのリアクションは以下のPCに発行されています。
岩神あづま